

中世シテ宮殿のグランド・サルにおける独立柱の空間 ―その空間の消失と19世紀の再発見―

The space of pillars as *la Grand' Salle in le Palais de la Cité* in Medieval times : Disappearance of this space and the rediscovering it in the 19th century

白鳥 洋子
SHIRATORI Yoko

キーワード：シテ宮殿のグランド・サル、独立柱の空間、アンリ・ラブルースト、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、19世紀フランスの建築

Keywords : *La Grand'Salle au Palais de la Cité*, space of pillars, Henri Labrouste, library *Sainte-Geneviève*, the French architecture in 19th century

Independent pillars are placed on the central axis in the Bibliothèque Sainte-Geneviève designed by Henri Labrouste, and this space is a rare example in the historic Western architecture. In this essay, I focused on this kind of the space, *la Grand'Salle* that existed in *le Palais de la Cité* in the medieval times Paris, who had the independent pillars on the central axis. I clarify the characteristic of this architecture, in the same time, clarify the rediscovery it by French architects and artists in the 19th century.

1. はじめに

ピエール＝フランソワ＝アンリ・ラブルースト (Pierre-François-Henri Labrouste, 1801-1875) は代表作サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 (Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-1850)、パリ国立図書館 (Bibliothèque nationale, 1854-1875) で知られる。両図書館は、記念碑的な公共建築に鉄構造が露出の状態で使用された早期の事例としてその意義が認められている。近代建築史においては、彼と彼の作品に鉄構造の新たな展開への貢献、技術的先駆性に価値を認める見解が一般的であり、西洋建築の芸術意匠の系譜においては、彼は19世紀フランスの狭義の古典主義に対して、幅広い表現を許容するロマン主義を確立し、同時に建築の合理的な潮流を新たに築いた人物とされる¹。彼の建築の特徴の一つに独立柱の空間が挙げられ、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の大閲覧室では中央軸上に細い鉄構造の独立柱が配置されている。パリ国立図書館の大閲覧室においても細い鉄構造の独立柱は正方形のグリット上に

規則的に配置され、どちらの柱配置も伝統的な西洋建築においては稀な構成である。

先の論文「フランス国立図書館の端緒、ルイ9世の図書館：シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と19世紀の建築」²では、フランス国立図書館の端緒はルイ9世 (Louis IX, 1214-1270)、聖ルイ (Saint Louis)³の図書館であると考え、それに当たるシテ宮殿 (Palais de la Cité) のサント＝シャペルの宝物庫の存在の確かさを明らかにした。同時に、19世紀に行われたサント＝シャペル (Sainte-Chapelle, 1241/42-1248) の修復 (1836-) と、旧シテ宮殿であるパレ・ド・ジュスティス (Palais de justice, 正義宮、司法宮) の設計 (1835-) と建設、同宮殿の研究は、ラブルーストと親しい建築家達によって行われ、シテ宮殿と19世紀フランスの先駆的な建築家達との関係について言及した。さらに18、19世紀の資料から、シテ宮殿の最も大きな空間であるグランド・サル (Grande Salle, Grand'Salle) は中央軸に独立柱が配置された空間であったことが判明した。

本稿では、中世パリのシテ宮殿に存在したグランド・サルの独立柱の空間に着目し、その概要と特徴を明らかにする。さらに、19世紀フランスのどのような建築家達、芸術家達がこの空間と関わりを持ち、その価値を認めたのかについてを明らかにし、19世紀フランスの建築界におけるグランド・サルの再発見についてその意義を論じることを目的とする。

2. シテ宮殿のグランド・サル

2-1. 建造の経緯と概要

シテ宮殿はセーヌ川のシテ島に存在した中世フランスの王宮であり、その起源はガロ・ロマン時代の要塞に遡る。6世紀以降、メロヴィング朝の王たちはパリに來た際にここに逗留した。10世紀末以降のカペー王朝の時代になると、パリが回復して首都としての機能を果たし始め、王たちはシテの王宮に居城した。要塞の王宮は漸次的に整備され、拡大し、シテ宮殿となった。パリの都市壁 (左岸1190-1209、右岸1200-1215) を建造したフィリップ・オーギュスト (Philippe Auguste, 1165-1223) はこの王宮を堅固な要塞へと改築した。サント＝シャペルを建造したルイ9世は政府機構を王宮に集め、同時にここに居城した⁴。

18世紀の版画や19世紀の復元研究ではこの宮殿は一般的にゴシック期の繊細な意匠で表現され、一連のゴシック建築の集合する様相が興味深い。シテ宮殿の素晴らしさについては『フランス大年代記 (Grandes Chroniques de France)』第5巻、「フィリップ美貌王 (Philippe le Bel)」の章で「新しい宮殿は素晴らしく、フランスの最も美しい宮殿」⁵と記されており、この文章はしばしば研究書で引用されている⁶。シテ宮殿はフィリップ4世、美貌王 (Philippe IV, le Bel, 1284-1305)⁷の時代に大きく改築された。この『フランス大年代記』はサン＝ドニ教会 (église Saint-Denis) で保管されていたものであり、フランス革命のヴァンダリズムの難を逃れた。同著は1837年に王立碑文・文芸アカデミー (Académie royale des Inscriptions et Belles-Lettres) から刊行され、ラブルースト達が活躍し始める頃と一致している。

シテ宮殿で最も注目される建築はグランド・サル・デュ・

パレ (Grande Salle du Palais, 宮殿大広間)⁸であり、この宮殿の中で最も大きく、中世パリを代表する建築である。この建物はフィリップ4世、美貌王が大臣アンゲラン・ド・マリニー (Enguerrand de Marigny, 1260-1315) に建造を命じたものであり、政治機構の各部署をここに集めると同時に、王の権威に相応しい建築を建造した⁹。グランド・サルの室内は豪華に装飾され、それぞれの柱と壁には歴代の王の彩色木彫像が飾られた。ここには「ドイツから取り寄せた巨大な黒大理石のテーブルが置かれ、王はこの大テーブルで賓客をもてなした」とする記述が残され¹⁰、現在もその一部がコンシエルジュリー (Conciergerie) に残されている¹¹。グランド・サルの室内は詳細を後述する版画 (図1) や絵画 (図8、図10) に描き残されており、それらがこの空間の魅力を伝えている。

グランド・サルの下階は「衛兵の間」(Salle des Gens d'armes, 13世紀末-14世紀初頭)であり、大規模な改修がなされなかったため、ゴシック期の建築が良好に残され、カペー王朝の王宮の面影を今に伝えている。衛兵の間は宮廷で働く人々が使用していた場所であり、2000人を収容することができたとされている¹²。15世紀以降は倉庫、貯蔵庫として使用された。衛兵の間は14世紀パリのゴシック建築の傑作の一つであり、同時に、現存する非宗教のゴシック建築として貴重な事例である。衛兵の間は、長さ

63.30m、幅27.40m、天井の高さ8.50mと大きなものであり¹³、ゴシック期の非宗教建築では最大級に属する。数多くの重厚な柱が均等のグリッド上に並び、その上部にリヴ・ヴォールトが均等に広がり (図2)、これらの機構が上部階のグランド・サルを支えている。柱とリヴ・ヴォールトの森となった衛兵の間も魅力的な空間であり、均質感が現代的でもある。衛兵の間は宮廷の職員の場所としての役割を終えると、コンシエルジュリーの一部として監獄となった。この建物は上階がパレ・ド・ジュスティス、下階がコンシエルジュリーと所属が異なっていることにも特徴がある。

2-2. グランド・サルの消失、サル・デ・パ・ベルデュの再建

14世紀に宮殿として使用されなくなったシテ宮殿は、18世紀のフランス革命までの間、フランスの財務省、高等法院 (Parlement)¹⁴などの司法機関、議会の役割を担った名士会 (Assemblée des notables)¹⁵などが置かれ、司法の宮殿、パレ・ド・ジュスティスとなった。パレ・ド・ジュスティスはしばしば火災の被害を受けた。1618年の火災ではグランド・サルが被害を受け、一連の歴代フランス国王の木彫像が焼失した。その後は1630年にサント・シャペルの塔が、1737年には会計院が火災により焼失した。革命が近づくルイ16世の治世下では1776年に大きな火災に遭い、コンシエルジュリーとサント・シャペルの間にあった「メルシエの間 (Salle au Merciers, 議員の間)」、旧グランド・サルに隣接する「皇太子妃の間 (Salle Dauphine)」など、「5月の中庭 (Cour du Mai)」を囲む建物が大きな被害を受けた¹⁶。

この火災後、「5月の中庭」を囲む建築の再建はギヨーム・マルタン・クチュール (Guillaume-Martin Couture, 1732-1799)、ジャック・ドニ・アントワヌ (Jacques-Denis Antoine, 1733-1801)、ピエール・デメゾン (Pierre Desmaisons, 1711-1795)の建築家達に委ねられた¹⁷。1802年に版画家ピエール・ガブリエル・ベルトー (Pierre-Gabriel Berthault, 1737-1831)により制作された版画「21名のジロンド党議員の処刑：1793年10月31日、すなわち共和暦2年霧月10日 (Mort des 21 députés de la Gironde : le 31 octobre 1793, ou 10 brumaire an 2. e de la République)」(図3)には、既に現在と概ね同様の姿が版刻されていることから、18世紀末には現在の姿になっていたことを確認することができた。この版画には、恐怖政治の歴史的事件、1793年のジロンド派の議員の処刑が版刻され、この空間、サル・デ・パ・ベルデュ (Salle des pas-perdus) がフランス革命の歴史的な舞台となったことを記している¹⁸。パ・ベルデュ (pas perdus) は直訳すると「失われた歩み」を意味し、市役所や裁判所などの公共建築の一般に公開されたコンコースや大きなホールの総称である。旧シテ宮殿のグランド・サルはパレ・ド・ジュスティスのホール、サル・デ・パ・ベルデュへと変わった。このホールの名称は18世紀の資料でもサル・デ・パ・ベルデュとなっており、現在もこの呼称で呼ばれている。

サル・デ・パ・ベルデュでは中心軸上の独立柱の列柱がピア (壁柱) に置き換えられ、同サルは独立柱の空間ではなくなった。また、露出の状態で使用されていた木造の部

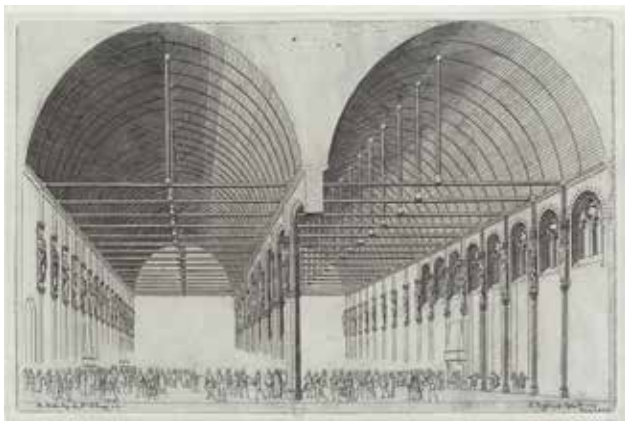


図1：シャルル・メリヨン、「旧パレ・ド・ジュスティスのラ・サル・デ・パ・ベルデュ」(セルソーに基づく)、1855。中世シテ宮殿のグランド・サルの様子。



図2：「衛兵の間」、コンシエルジュリー、13世紀末-14世紀初頭。上階の現サル・デ・パ・ベルデュ、旧グランド・サルを支える。

材も木造天井も再建されなかった。重厚な石造の半円アーチとヴォールト天井に置き換えられ、堂々としたローマの意匠で纏められた。重い石造のアーチと天井を支えることを勘案すると、中心軸の柱をピアに変更したことは理解できる。しかしながら、中世のゴシック期の建築が持つ独立柱の空間が失われ、その軽快感を目にすることができなくなったことは残念である。

19世紀のパレ・ド・ジュスティスの全体の計画と設計(1835-1840)は、当初は建築家ジャン＝ニコラ・ユイヨ(Jean-Nicolas Huyot, 1780-1840)が行なった。ユイヨは歴史家として著名であり、王立エコール・デ・ボザールでは創設時から建築史の講義を担った人物である。彼はラブルースト達の建築史の師匠に当たる。ユイヨは小アジア、エジプト、ギリシアの調査研究を行い、東方建築に造詣の深い博識の人物として知られ、エジプトを起源とする東方の建築に対する知的門戸を開いた彼の歴史観は想像力豊かであったと評される¹⁹。

ラブルーストとの関わりにおいては、彼が1824年にローマ大賞を受賞した際に、ユイヨはシャルル・ペルシエ(Charles Percier, 1764-1838)と共にラブルーストの優勝を推挙した人物である²⁰。1824年のローマ大賞コンクールのプログラムは「最高裁判所(Cour de cassation)」であり、後にユイヨが取り組むこととなる裁判所の主題でラブルーストはローマ大賞を受賞した。ユイヨが1840年に死去した後は、ラブルーストのローマ留学時代からの友人である建築家ジョゼフ＝ルイ・デュク(Joseph-Louis Duc, 1802-1879)がパレ・ド・ジュスティスの設計計画を受け継いだ。デュクがパレ・ド・ジュスティスの設計、建設を担っている時期に、パリ・コミューンが起り、サル・デ・パ・ベルデュは「血の一週間」²¹の1871年5月24日の火災で大会議室(Grand-Chambre)と共に大きな被害を受け、同サルのアーチと天井は瓦解した²²。

現在のサル・デ・パ・ベルデュと概ね同じ姿(図5)の19世紀初頭の版画(図4)が残されており、そこにはデュラン(Durand)、ジャニネ(Janinet)と記載されている。前者は建築家ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン(Jean-Nicolas-Louis Durand, 1760-1834)、後者は版画家ジャン＝フランソワ・ジャニネ(Jean-François Janinet, 1752-1814)である。デュランは18世紀末から19世紀初頭に活躍した建築家、理論家であり、ラブルースト達の世代にとって指導的立場の人物であった。『建築講義要録』²³では建築を幾何学と施設内容により解説し、19世紀フランスの建築における合理的な思考の醸成に寄与した。パレ・ド・ジュスティスの平面計画の構成はデュランの著書で示された正方形と長方形を組み合わせて繰り返す構成と同様である。

パレ・ド・ジュスティスの設計者は、18世紀末ではギイヨーム＝マルタン・クチュール達、19世紀ではユイヨ、デュクとなり、パレ・ド・ジュスティスの設計計画では多くの建築家が関係したことを把握することができた。加えて、現在ではバティニョール(Batignolles)地区に新しいパレ・ド・ジュスティスが建設され、レンゾ・ピアノ(Renzo Piano)が設計を担った。新パレ・ド・ジュスティスは2018年に竣工し、シテ島のパレ・ド・ジュスティスは裁判所としての役割を終えようとしている²⁴。



図3：「21名のジロンド党議員の処刑：1793年10月31日、すなわち共和暦2年霧月10日」、ピエール＝ガブリエル・ベルトール、1802。18世紀末のサル・デ・パ・ベルデュの様子。



図4：サル・デ・パ・ベルデュの版画、ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン、ジャン＝フランソワ・ジャニネ、1808。



図5：現在のサル・デ・パ・ベルデュ。パレ・ド・ジュスティス。

3. 19世紀の研究と芸術表現におけるグランド・サル

3-1. 都市図と建築研究

中世パリの都市や建築を幾何学的に記した最も古い地図は1754年のドラグリーヴ修道院長(l'abb Delagrave, 1689-1757)²⁵の「シテの都市詳細図(Plan détaillé de la Cité)」²⁶であり、それを確認すると、火災前のシテ宮殿が



図8：シャルル・ジロー、「中世の宮殿のグランド・サル」、1878。

4. グランド・サルの建築的特徴

4-1. 平面と石造部の特徴

これらの絵画、版画、文献資料からグランド・サルの建築的特徴を掴むことができる。第一の特徴は二つの等しい大空間が等価に並び建つ構成であり、中央軸上に独立柱が配置されていることである。その列柱の上部に連続アーチが載り、これが中央軸の長手の横架の構造となっている。グランド・サルの大きさはヴィオレ＝ル＝デュクの復元図面(図7、図9、図11)から、幅は構造壁の芯々寸法で約29m、内法寸法で約27mである。長さは平面図(図9)では芯々寸法で約73m、内法寸法で約71m、配置図(図7)によると芯々で約68mである³¹。短手のスパンは芯々寸法からは約14.5m、内法寸法からは約13.5mとなる。天井までの高さは約21mとなる。この比例は約1:1.56であり、黄金比に近い。面積は芯々寸法で約2,100㎡となり、中世ヨーロッパの宮殿や市庁舎のホールでは最大級のホールの一つと言える。

次の特徴は幾何学に合理性があることである。短手のスパンは下階の「衛兵の間」ではさらに2分割されて4スパンとなり、配置図(図7)では約7.25m、平面図(図9)では約6.75m(内法)、約7.25m(芯々)となっている。長手は9スパンあり、配置図(図7)では約7.6m、平面図(図9)では約8mとなっている。全体として概ね7.25m、8mの長方形グリッドで構成されていることが理解できる。グリッド数は短手が4グリット、長手が9グリット、合計36グリットとなっている。1668年以前の1ピエ(pied)は約327mmであることから、7.25mは約22ピエ、8mは約24ピエであり、20ピエ強の寸法で構成されている。上部の天井と床を石造のリヴ・ヴォールトを建造する幾何学を勘案すると、幾何学のグリッドの構成や扱いやすい数には合理性が感じられる。

石造部の構成も大変興味深く、構造体である堅固な控え壁と壁面を造る非構造体の壁面の区別が明確である。堅固な控え壁は風圧やヴォールトの推力などの水平力を支えている。これにより下階の連続するリヴ・ヴォールトと上階の内部構造の安定性が保たれており、構造に対する賢さがある。二つの空間が等価であることも荷重バランスの観点から有利性がある。グランド・サルの構造はラブルーストの「箱入れ構造」と近い構造の考え方を有している。グランド・サルの控え壁は現在も残っており、後の改修によ

り隠されて、ファサードからは見えないが、屋根の上部に控え壁の頂部を認めることができる。

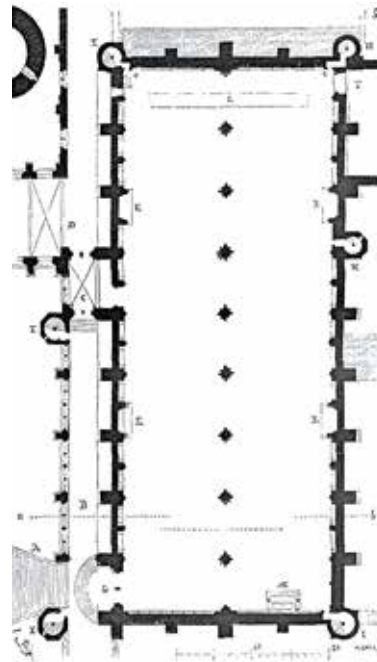


図9：ウジェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュク、グランド・サルの平面図(復元)。『11世紀から16世紀のフランス建築の論理的辞典』、1854-1868。

4-2. 木造架構の特徴

小屋組では細い水平材の陸梁、オントレ(entrait)、と垂直材の真束、ポワンソン(poinçon)が連続し、その繊細な様子は大変魅力的である(図1)。1825年に出版された『パリのパレ・ド・ジュスティス、コンシエルジュリー、サント・シャペルの歴史と絵画的描写』³²の図版(図10)でも天井と繊細な木造架構の美しく描き出され、その様子を伝えている。オントレは小屋組と木製の船形尖頭ヴォールト天井の開く力、推力に対して両端を引っ張っている。ポワンソンはトラスのキングポストに当たる部材であり、応力は引張である。部材の細さからも引張材であると判断される。木製のヴォールト天井は石造のヴォールト天井と比較すると推力は小さいので、オントレが細いことや木材であることは理に適っている。応力の種類や大きさに合わせた材を採用することには自然な論理があり、同時に意匠の効果も高く、現代的でもある。オントレとポワンソン以外的小屋組は天井の裏に隠されていて、それらのみを見せ、その他の部材は見せないという手法であり、秀逸な意匠である。

ヴィオレ＝ル＝デュクの小屋組の復元研究(図11)では、斜材、アルバレトリエ(arbalétrier)で小屋の形を造るものであり、日本の合掌造りに近い。アルバレトリエは合掌に当たる材であり、屋根形状を造ると同時に小屋を造る構造材となっている。頂部では、二つの三角形による菱形と水平材による三角形でその箇所の形状安定性を確保している。船形に湾曲した部材は小さな三角形を作り、天井を形成する役割と同時に、小屋組の形状安定性の向上に有効である。グランド・サルの木造の船形ヴォールト天井と小屋の一部露出の構成は、構造的利点と意匠的效果を同時に解くものであり、秀逸である。これはパリやフランス北部の小中規模のゴシック建築で見られる天井であり、現在でもこの形式の屋根と天井を持つ教会が残っている。

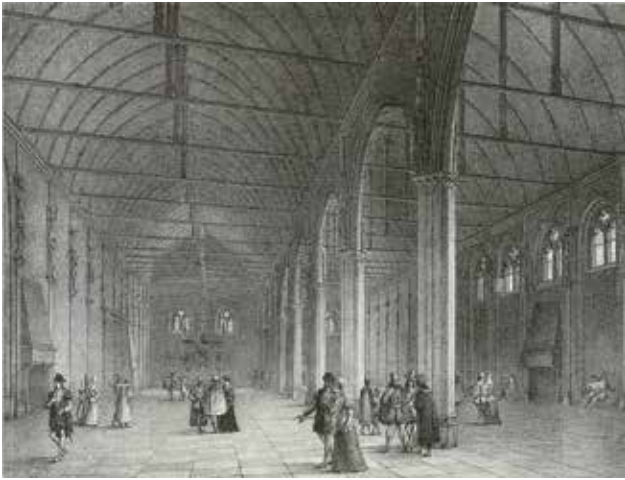


図 10：グランド・サル（内観）、『パリのパレ・ド・ジュスティス、コンシエルジュリー、サント・シャベルの歴史と絵画的描写』、1825。

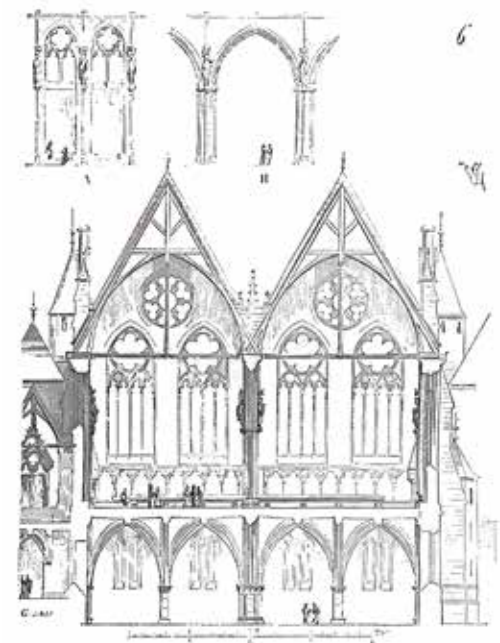


図 11：ウジェーヌ・ヴィオレ＝ル＝デュク、グランド・サルの断面図（復元）。『11 世紀から 16 世紀のフランス建築の論理的辞典』、1854-1868。

5. まとめ

中央軸に独立柱が配置された空間は、西洋建築では稀であるが、シテ宮殿のグランド・サルのように中世ゴシック期の建築に存在していた。グランド・サルは堂々とした二つ大空間が等価に並び、木造の細いオントレとポワンソンが連続する繊細な様相に特徴があり、それらが対比的に共存する魅力的な空間であったことは新鮮な発見であった。現存していれば、中世パリのゴシック期の傑作としてその価値が認められたことであろう。グランド・サルは、16 世紀のセルソー、19 世紀のメリヨンの版画、18 世紀のドラグリーヴの都市図に描かれ、加えて 19 世紀のヴィオレ＝ル＝デュク、ホフバウアーの研究に取り上げられた。いずれの人物もその分野の第一人者であり、このことはグランド・サルの価値の高さを示している。また、同時にこれは幸運なことでもあり、彼らの著作によりこの空間の姿が後世に伝えられた。

これらの資料から得られるグランド・サルの建築的特徴として木造架構と木造天井が挙げられ、架構の一部を露出した手法は秀逸であった。木造架構の推力と細いオントレとポワンソンの関係性には論理性があり、全体が 20 ピエ強のグリットで合理的に建造されていることも興味深い発見であった。サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館とグランド・サルを比較参照すると、中央軸に独立柱が配置された空間、堅固な控え壁の中に内部に繊細な構造機構を入れた「箱入れ構造」の概念、大きなテーブルの設置において共通性を認めることができる。

木造架構の残る大広間はシテ宮殿の他にポワティエ (Poitiers) のパレ・ド・ジュスティス、旧ポワティエ宮殿のグランド・サルが挙げられる。ポワティエのグランド・サルでは中央軸に柱はなく、天井がない点がシテ宮殿のそれとは異なるが、現存するグランド・サルとして興味深い。大変興味深い事例はオンフルール (Honfleur) のサント＝カトリヌ教会 (église Sainte-Catherine, 15-16 世紀) であり、中央軸上に独立柱が配置され、オントレとポワンソンが露出した木造の屋根架構と船形天井となっている。自然な建造と構造の論理があり、こうしたことはラブルーストの建築と共通する魅力である。サント＝カトリヌ教会はフランス最古の木造教会であり、ヴィオレ＝ル＝デュクの指導の基にウジェーヌ・ミレ (Eugène Millet, 1819-1879) が修復を行なった。ヴィオレ＝ル＝デュクはラブルーストと親しい間柄であり、ミレはラブルーストの直弟子である。ミレは後にヴィオレ＝ル＝デュクに師事した。これについては別の機会に詳細を述べたい。

パレ・ド・ジュスティスへの改修を行なったユイヨとデュク、シテ宮殿の研究を行なったヴィオレ＝ル＝デュクはラブルーストと近い建築家達であり、グランド・サルはラブルーストと共に 19 世紀フランスの建築界のロマン主義、合理主義を牽引した建築家達が関係し、彼らによりその価値の再発見がなされたと言える。重要な発見としては、今回取り上げた版画、絵画作品もヴィオレ＝ル＝デュクの研究書も、ラブルーストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 (1838-1850) の建設の後に制作されたことである。ラブルーストは、研究もなされず、絵画にも描かれていなかった独立柱の空間をサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館で実現していたことが明らかになった。これはラブルーストの卓越した先駆性を示している。言い換えれば、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の空間は、独立柱の空間の観点からグランド・サルの見られる中世パリの建築が持つ空間の新鮮さや価値を生み出し、少し後の世代の芸術家、研究者達が追従し、創造や再発見の契機としたとも考えることができる。

西洋建築では一般的にバシリカ形式の教会堂建築に見られるように中心軸は空間であることが多く、中心性を有している。これにより空間には主従や強弱があり、建築論でしばしば言及される「ヒエラルキー」を有している。西洋では主従や強弱の無い空間が多く造られるようになるのは 20 世紀の近代建築まで待つ必要がある。中央軸に独立柱が配置されたサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館や 19 世紀に再発見されたグランド・サルの空間は、主従や強弱のない等価な空間を持ち、「ヒエラルキーの消失」という観点からも、近代建築の萌芽におけるこれらの建築の意義を認

めることができるのである。

謝辞

本研究は JSPS 科学研究費補助金（科研費）の助成を受けたものである。基盤研究（C）、17K06749、『パリ国立図書館における分離構造と細い独立柱の空間の源流』。This research was supported by JSPS KAKENHI, Grant Number 17K06749, Grant-in-Aid for Scientific Research (C). 2017 年 8 月、2018 年 8 月、2019 年 3 月、2019 年 8 月に行った現地調査、研究活動では様々な方々、研究機関から多くの支援と協力を賜りました。パリでは建築家のブリュノ・ゴードン（Bruno Gaudin）氏とヴィルジニー・ブレガル（Virginie Brégat）氏、修復建築家のジャン＝フランソワ・ラノー（Jean-François Lagneau）氏とパトリス・ジラル（Patrice Girard）氏をはじめに、フランス国立図書館、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の方々、パリ国際大学都市スイス館の方々、アテネの古代アゴラ博物館、イタリアの遺跡と教会の方々に心から感謝とお礼を申し上げます。

参考文献

シテ宮殿関連：Viollet-le-Duc, Eugène., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, B. Bance, Paris, 1854-1868. Hoffbauer, Theodor-Josef-Hubert., *Paris à travers les âges, aspects successifs des monuments et quartiers historiques de Paris*, Firmin-Didot, Paris, 1875-1882. Favard, Jean., *Au cœur de Paris, un palais pour la justice*, Découvertes Gallimard, Paris, 1995. Delon, Monique., *La Conciergerie, palais de la Cité*, Itinéraires, Editions du Patrimoine, Paris, 2000.

19 世紀フランスの建築関連：三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、東京、1982。ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19 世紀建築 2』、図説世界建築史 14、土居義岳訳、本の友社、2002。

図版出典

図 1、3、6、：BNP. 図 4：ONB. 図 2、5：筆者撮影。図 7、9、11：Viollet-le-Duc (1854-1868). 図 8：BPJ. 図 10：Sauvan (1825).

註

¹ アンリ・ラブールストに関する主要参考文献：Saddy, Pierre., *Henri Labrousse. Architecte, 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites, Paris, 1977. Drexler, Arthur (ed.), *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts*, The Museum of Modern Art, New York, M.I.T. Press, Cambridge, Massachusetts, 1977. Middleton, Robin (ed.), *The Beaux-Arts and nineteenth-century French architecture*, Thames and Hudson, London, 1982. Zanten, David Van, *Designing Paris : Architecture of Duban, Labrousse, Duc and Vaudoyer*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts London, 1987. Leniaud, Jean-Michel (dir.), *Des palais pour les livres*,

Labrousse, Sainte-Geneviève et les bibliothèques, Maisonneuve & Larose, Paris, 2002. coll., Dubbini, Renzo (cura), *Henri Labrousse 1801-1875*, Electa, Milano, 2002. coll., Béliet, Corinne, Barry Bergdoll, Marc le Cœur, *Labrousse (1801-1875), architecte : La structure mise en lumière*, Cité de l'architecture et du Patrimoine, The Museum of Modern Art, Bibliothèque nationale de France, Nicolas Chaudun, Paris, 2013. ピエール・サディ、『建築家、アンリ・ラブールスト』、1977、丹羽和彦翻訳、福田晴彦編集、翻訳脚注協力白鳥洋子、中央公論美術出版、2014。アンリ・ラブールストに関する筆者の論文：「アンリ・ラブールストの青年期と師匠たち：18 世紀の革新性の継承」、名古屋造形大学紀要、第 18 号、pp. 59-74、2012 年。「アンリ・ラブールストに関する建築史的研究：パエストゥムの神殿の復元と論争に見られる分離構造の源流」、博士論文東京大学大学院工学研究科博士課程、2015。「アンリ・ラブールストのエコール・デ・ボザール時代：コンクール・デミュラシオンにおける 18 世紀の啓蒙性と近代建築の予兆」、長岡造形大学研究紀要、第 14 号、pp.6-16、2017 年。「フランス国立図書館の端緒、ルイ 9 世の図書館：シテ宮サント＝シャペルの宝物庫と 19 世紀の建築」、長岡造形大学研究紀要、第 15 号、pp.13-21、2018 年。「パリ国立図書館の装飾芸術の主題に関する考察：大閲覧室のメダillon に見られる人文学の叡智」、長岡造形大学研究紀要、第 16 号、pp.14-21、2019 年。

² 白鳥 (2018)。

³ ルイ 9 世：カペー朝第 9 代目の国王。聖ルイとも呼ばれる。フランス封建王政の最盛期を築いた。シテ島にサント＝シャペルを建造したことで知られる。裁判部門であるパリ高等法院を国王政府から独立させた。ルイ 9 世は第 7 次 (1248 年)、第 8 次 (1270 年) と 2 度の大規模な十字軍遠征を行った。1297 年に聖人に列せられた。一般的な事項の解説は以下の辞典、書籍を参照した。『建築大辞典』、第 2 版、彰国社、1993、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦、『広辞苑』、第六版、新村出編、岩波書店、2008。『ブリニカタ国際大百科事典』、2010、*Encyclopédie Larousse en ligne, Encyclopædia Universalis, Éditions en ligne de l'École des chartes, data.bnf.fr*, bibliothèque nationale de France。『フランス史 1：先史～15 世紀』、世界歴史大系、山川出版社、1995。

⁴ Delon (2000), pp.4-15.

⁵ *Les Grandes Chroniques de France*, conservées en l'église Saint-Denis, tome 5, Paulin Paris, L'Académie royale des Inscriptions et Belles-Lettres, Techener Libraire, Paris, 1837, LXXIII, p.209.

⁶ Delon (2000), p.15.

⁷ フランスカペー朝第 11 代王。

⁸ シテ宮殿の大広間 (Grande Salle) は古い文献ではしばしば Grand'Salle と記される。

⁹ Delon (2000), pp.12-15.

¹⁰ ibid. ラブールストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館

では開館当初、長く巨大な木製のテーブルが設置されていた。

¹¹ 2018年8月、現地確認。

¹² Delon (2000) p.49.

¹³ Delon (2000) p.54.

¹⁴ 高等法院 (Parlement) : 中世に起源を持つフランス国王の最高司法機関。フランス革命で廃止された。

¹⁵ 名士会 (Assemblée des notables) : 大革命前のフランスで国政に関する重要な問題を審議する必要があるときに臨時に召集された国王の諮問機関。聖職者・貴族・平民の三身分の代表者により構成された。名士会の構成員は身分ごとの選挙によってではなく、国王の指名によって選ばれた。

¹⁶ Delon (2000) p.12, p.26. 白鳥 (2018), pp.17-18. 「メルシエの間 (Salle au Merciers, 議員の間)」は廊形状の建物であり、「メルシエのギャラリー (Galerie au Merciers)」と称されることもある。ドラグリーヴの「シテの都市詳細図」の記載の通り「メルシエの間」とした。「皇太子妃の間 (Salle Dauphine)」は王室が居住した建物であるが、これも同都市図の記載の通りとした。

¹⁷ Delon (2000) p.26.

¹⁸ Favard (1995) p.49. Delon (2000) p.31.

¹⁹ 三宅 (1982), p.50. ユイヨについては白鳥 (2012) で述べた。ユイヨがエジプトで収集した碑文はジャン＝フランソワ・シャンポリオン (Jean-François Champollion, 1790-1832) に届けられ、ヒエログリフの解読に貢献した。

²⁰ Bailly, Antoine-Nicolas, *Notice sur M. Henri Labrousse*, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, séance du 16 décembre 1876, Firmin-Didot, Paris, p.5.

²¹ ベルサイユ臨時政府は1871年5月21日にパリ市中に侵入し、「血の一週間」と呼ばれる凄惨な市街戦が勃発した。28日にパリ・コミュンは鎮圧された。数多くのパリ市民が虐殺された。

²² Favard (1995), p.55.

²³ Durand, Jean-Nicolas-Louis., *Précis des leçons d'architecture données à l'école royale polytechnique*, Paris, 1805, 1825. ジャン・ニコラ・ルイ・デュラン、『建築講義要録』、飯田喜四郎、丹羽和彦翻訳、中央公論美術出版、東京、2014。同著は19世紀から20世紀にかけて多数再版され、不朽の名著となった。

²⁴ 新パレ・ド・ジュスティスはパリの北の端、バティニョール (Batignolles) 地区に位置し、パリの新名所となっている。同時にシテ島のパレ・ド・ジュスティスは裁判所ではなくなった。同パレが最高裁判所であった時代では、施設の性格から見学の時間や範囲が限定されていたが、筆者が現地調査見学を行った2018年の夏は、同パレの内部機構の移転が概ね終了したところであり、シテ島のパレ・ド・ジュスティスの19世紀の裁判所の名残を残す姿を見る最後の機会となった。また内部の見学と写真撮影の許可が下りるなどの幸運に恵まれた。

²⁵ ドラグリーヴ修道院長、ジャン・ドラグリーヴ (Jean Delagrive) : ラザリスト会の神父、地理学者。作図と幾何学の発展へ貢献した。パリ市の地理学者として幾

何学的に正確で詳細な地図を作成した。大改造前のパリを知る資料として信頼されている。

²⁶ *Plan détaillé de la Cité dédié à Messire Louis Basile de Bernage conseiller d'état prévôt des marchands et à messieurs les échevins de la ville de Paris* par M. l'abbé Delagrive, 1754.

²⁷ Viollet-le-Duc (1854-1868), Tome 7.

²⁸ ジャック・アンドルーエ＝ドゥ＝セルソー (Jacques Androuet / Androuët du Cerceau, avant 1520-1585 ou 1586) の主な著作 : Androuet du Cerceau, Jacques., *Leçons de perspective positive*, M. Patisson, Paris, 1576. Androuet du Cerceau, Jacques., *Livre d'architecture*. B. Prévost, Paris, 1559. Androuet du Cerceau, Jacques., *Les plus excellents bastiments de France*, le premier volume, le second volume, Jacques Androuet du Cerceau, Paris, 1576, 1579, Réimpression, Sand & Tchou, Paris, 1993, Beaux Livres, Paris, 1988. 1576年から1579年に刊行された『フランスの最も優れた建築、第一巻、第二巻』は、2012年4月から5月にかけて金沢21世紀美術館で開催された「世界を変えた書物」展に展示された。

²⁹ Hoffbauer (1875-1882), p.151.

³⁰ ヴィオレ＝ル＝デュクの復元図面 (図7、図9、図11) から筆者が算出した。

³¹ ピエ (pied) は昔のフランスの長さの単位であり、「足」、「脚」を意味する。1668年以前では約326.6mmであり、1668年から1799年の間は約324.8mmである。

³² Sauvan, Jean-Baptiste, Jean Philippe Schmit, *Histoire et description pittoresque du Palais de justice de la Conciergerie et de la Sainte Chapelle de Paris*, G : Engelmann, Paris, 1825.